はじめに

後継者不足が叫ばれる伝統工芸の世界で、それでも頑張って活躍する若手の職人たちがいる。以前、この世界に飛び込む若手の女性たちを取材した（『伝統工芸を継ぐ女たち』學藝書林・二〇一三年）が、彼女たちの多くは面白そうという好奇心から伝統工芸の世界に入り、そして仕事が好きになり、自分が使いたいものを作る、という視点での作品作りをしている。

では若手の男性たちはどうしているのか。若手女性たちの活躍が、この業界に一つの風穴をあけているのに、男性の姿があまり見えてこない。その実態を知りたいと、三〇～四〇代の一六人の男性たちを取材し、その結果をまとめたのが本書だ。

彼らのほとんどは、染色業や塗師、陶磁器といった伝統的工芸品（注）を作る「家業」を継いでいた。五〇～六〇代の親たちは、自分の子どもたちには好きな道を歩ませたいと、決して家業を継げとは言わないで育てている。何代も続く家業といえども、この先、この技（わざ）が生き残っていけるかどうか、親たちにもわからない時代なのだから。しかし家業であるということは、それなりに経済的基盤があるというのも事実だ。

だから、いろいろな仕事に就くなど回り道をしながらも、サラリーマンより自由だし、やり様によってはうまくいくかも知れないなどと思いつつ、根底には「長男だから」という理由で、家業を継いでいた。そこが女性たちの仕事の向き合い方とは違っていた。

しかし、それからも問題があった。単に長男だから家を継ぐといっただけでは長続きしない。伝統工芸という技を磨く必要があるからだ。父も祖父もその技によって生きてきたのだ。本人が技を磨く中で、初めて父親のすごさ、あるいは祖父の見事さを感じるのだ。「なぜ自分が父や祖父もいたこの場所にいるのか」

という疑問から、「私はこの仕事が好きだ。だから実家に戻って来たのは必然だった」と気づいたとき、初めて家業の後継者として一人前になったと言えるのだ。つまり、家業を継いだ意味が心から納得できたとき、その後の仕事への取り組み方や新しい分野への挑戦が生まれている。

長男だからと家を継いでも、自分自身の納得というステップを通らないと、職人としては本物にはならないのではないか。そうか、それが男女の職人のそもそもの違いなのだ。

職人たち作り手は、使い手である消費者の心をつかむことがまず大事。それにはなにより、生活感覚を磨かなければならない。取材した彼らは、華やかさはあまりないけれど、それぞれが腕を磨き、いい仕事を目指している。最近は、職人とデザイナーが組んだ商品開発やネットを利用しての販売法など、新しい動きも出てきた。その中で、日本の技の後継者として、彼らの今後の活躍を大いに期待したいと思う。

カメラマンの山下三千夫さんと取材を重ねたが、私は文章、彼は写真で、それぞれ違う視点で彼らを表現しようとした。必ずしも文章に沿った写真でないのは、それが山下さんの表現だからだ。

（注）「伝統的工芸品」とは、「日常的に使われるもの」「作り方が手工業的であること」「一〇〇年以上の伝統的な技術、技法によること」「原材料も伝統的に使われてきたもの」「一定の地域で産地を形成している」という要件で、経済産業省が指定する。平成二九年六月現在、全国二二五品目が指定されている。

伝統工芸を継ぐ男たち　目次

はじめに……4

師は「鶴が舞い降りた…」と
播州三木打刃物・鉋鍛冶　森田直樹（兵庫県三木市）……9

いい親方との出会いが人生を変えた
南部鉄器　薫山工房　吉田修／田中鉱工房　菊池翔（岩手県盛岡市）……19

石の美しさ、趣を伝えるために
真壁石燈籠　大関一利（茨城県桜川市）……29

本当の豊かさを知ってほしい
大館曲げわっぱ　柴田昌正（秋田県大館市）……37

少子化時代、新しい展開を目指す
江戸木目込人形　柿沼利光（埼玉県越谷市）……45

心が騒ぐ七宝作品を目指して
尾張七宝　加藤芳朗（愛知県名古屋市西区）……53

はんこを作る人の人となりを表したい
甲州手彫印章　望月一宏（山梨県西八代郡市川三郷町）……63

品格ある調和を作り出す
京表具師　田中健太郎（京都府京都市中京区）……71
和服のよさを知り尽くしたい
名古屋黒紋付染　武田和也（愛知県名古屋市天白区）……81
いい仕事には基本が大事
琉球びんがた　安里昌泰（沖縄県宜野湾市）……89
掌の中の蒔絵ワールド
山中漆器・蒔絵師　針谷崇之（石川県加賀市）……97
会津産の漆を育てたい
会津漆器・塗師　大森康弘（福島県会津若松市）……105
人との出会いで広がる赤絵の世界
九谷焼・赤絵付師　見附正康（石川県加賀市）……113
妻は夫の、夫は妻の作品に惹かれる
益子焼　大塚雅淑（栃木県芳賀郡益子町）……123
祖父の技を乗り越える
伊万里焼・絵付師　川副隆彦（佐賀県伊万里市）……131
略歴……143
おわりに……148

後継者不足に悩む伝統工芸の世界。

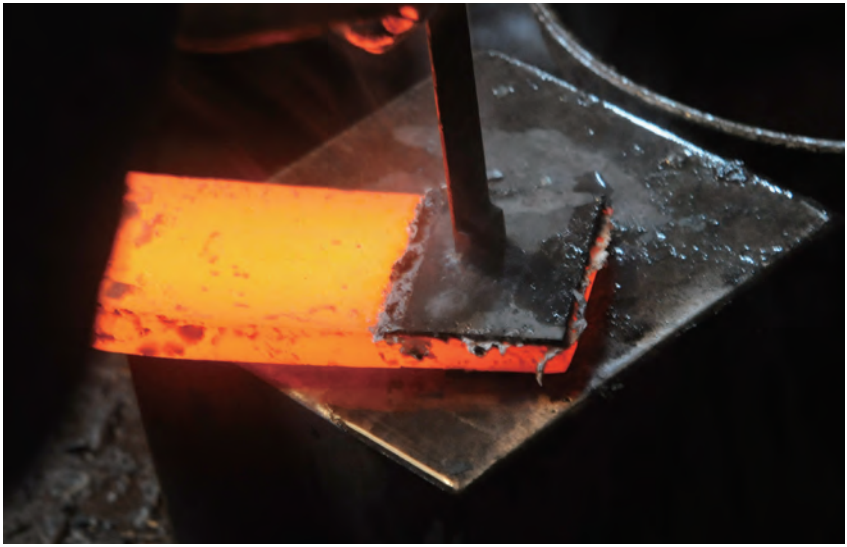
職人が、師匠と弟子という関係から生まれるものとすれば、

「技を伝える」ということは、今、どのような形なのだろうか。

師は「鶴が舞い降りた…」と

播州三木打刃物・鉋鍛冶　森田直樹（兵庫県三木市）

地鉄を鍛造して所定の厚みと幅にする。（敷作り）



水で濡らした鋼に接合剤（ホウ砂を中心とした粉末）をつけて載せる。

銑(せん)で細かく鉋(かんな)の甲の曲線を調整する。

森田直樹さんとの出会いを語る神吉岩雄さん。

神吉さんが「千代鶴の技」を伝えたいと、厳しく仕込んできたのが森田直樹さんだ。彼は大学時代に金属加工に興味を持ち、新潟の与板、岩手の南部などの産地を見学して歩き、三木市も訪ねたところ、二代目の千代鶴貞秀さん、つまり神吉岩雄さんと出会った。「商工会議所の前にひとりのおじさんが立っていて、聞き取れない言葉で話かけてきました。それが師匠で、パソコンで見たときの写真とは全く別の印象でした」。「名人の千代鶴」（注2）という名前を知っていた森田さん、二〇〇四（平成一六）年に神吉さんに入門した。

鉋は地金に刃物鋼を鍛接して、適度の硬さに焼き入れする。地金に使う和鉄や錬鉄、例えば、北前船のいかりに使われていた鉄や鎖の部分、あるいは鉄道の線路や橋に使われていたものが研ぎやすいため、よいとされる。神吉さんの工房の周囲には、そうした鉄がごろごろ転がっている。

その鉄を約一〇〇〇度のコークスの中で熱しては叩き、伸ばし、その後、鋼と接合していく。そのときの接合剤は、鉄粉、ホウ砂などを混ぜたものだ。これを寸法に切って炭の炉で鍛錬し、灰の中で鋼を軟らかくする。さらに叩いて硬く締め、歪みを直す。そして赤松の炭の中で赤くし、水の中に一気に入れて冷却し、焼き入れする。木製のふいごを左足で踏んで風を送りながら、真っ赤に焼けた鉄を引き出してはハンマーで鍛え直す。細かい火花が散り、衣服が燃えたり、ときには、火傷を負ったりすることもあるという。「だから木綿の作業着でないと……」

見よう見まね、体で覚える

覚えることすべてが師匠の見よう見まね、火を使う作業は手さばきが早すぎて、手順がつかめなかったこともある。火の温度は炎の色で何度ぐらいと見極めなければならない。しかも仕事のときだけしか火を見ら

れないので、その感覚を覚えるには、長年の経験が必要になる。「以前より見分けられるようになってきましたが、一〇年過ぎた今でも難しいです」と森田さんは語る。

特に、仕上げに、表面の中央部にわずかに窪みを作るが、その曲線の具合を覚えるため、仕事が終わった後で、わからないなりに何度もやって、自分の体に覚えさせることを繰り返した。

神吉さんは「世代の違いもあり、当初、見て覚えること、なぜそうせねばならないのかということを教えないと体が動かないような印象がありました。経験がものをいう仕事ですから、年数を経て一連の流れがわかってくると、あるとき、ふと理解できるものがあります。そこでまず感じ取ることを学ばせたかった。これは、先代から私に受け継がれたことのひとつです。」

師匠から弟子に、言葉で伝えるわけではなく、あくまでも自分の感覚、体で覚えるしかない。「技術は早く教えようとすれば三年あれば何とかなるかもしれない。そこに心の部分を加えて一緒に教えていく。これが難しく、このとき！　というタイミングでないと伝わりません。焼き入れのタイミングのようなものでしょうか」と神吉さん。

そんな神吉さんだが、数年前に病気で倒れた。森田さんは「一瞬、頭が真っ白になりましたが、今ある状況に区切りがついて、自分の身の振り方を考え直さないといけないときが来るまでは、目の前の師匠の病状が回復するようしっかり支えようという気持ちでいました」。

以前、神吉さんが森田さんを「鶴が舞い降りた……」と評してくれたことが忘れられない。だから、今は支えるのみ、そう覚悟したのだ。

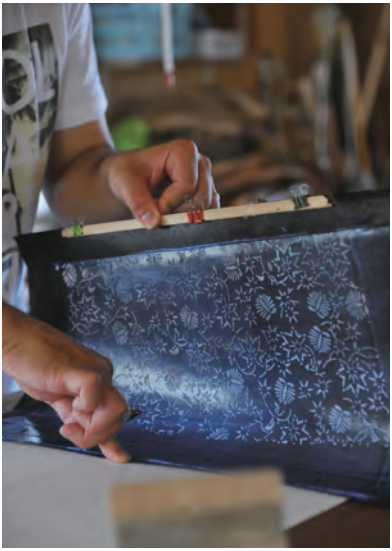
後遺症もなく回復した神吉さんは「退院後、すぐに鍛造と焼き入れに取り組ませ、常に立ち会い、教えきれなかったこの工程を叩き込みました。全体の技術がひとまず落ち着いたのが、一〇年目ぐらいのときです」。

すでに号として「直秀（なおひで）」をもらっていた森田さんだが、仕事の段取りや注文についての対応を任されたと

糊が引かれなかった部分に様々な色を挿していく。

小刀を使って型紙を突き彫りしていく。

色挿しが終わった部分にぼかしを入れて立体感を出す隈取りの作業。



繋ぎ目が見えないように繰り返して型紙を置いて糊を引く。

「父に学ぶことはまだまだある」と昌泰さんは言う。

沖縄の強く澄んだ日差しのように強いコントラストが特徴。

「有線技法」が特長

七宝とは、金属の素地にガラス質の釉薬を焼きつける技法だ。まず素地は銅や銀などで壺や花器の形に成形し、その表面に銀線で模様を形作っていく。これを植線という。尾張七宝の特長はこの「有線技法」で、模様の輪郭にリボン状に加工した銀線を立てていき、模様の境界線にする。これが非常に繊細で緻密な手作業で、この工程だけでも一人前になるには一〇年かかると言われる。その銀線の枠の中に、釉薬として色ガラスの粉を水や糊で溶いて色を挿す。そして摂氏七〇〇～九〇〇度の温度を工程によって使い分け、何度も釉薬を施しては焼成を繰り返していく。釉薬を重ねることによって、また焼き加減によって微妙に色合いが変化する。仕上げはまさに職人の経験と勘が左右するのだ。

そして最後に表面を研磨して滑らかにする。一〇種類以上の砥石や木炭などの道具で、鏡面のように研ぎあげていく。

加藤七宝製作所では、細密な菊や梅の模様を全体に散

純銀製の線を輪郭に沿ってピンセットで立てる。

りばめたデザイン、二羽の鶴が羽を広げて舞う姿、華麗な胡蝶蘭など花鳥風月の花器や壺、小物入れ、あるいはゴッホの絵や浮世絵などの額絵、帯留やペンダントのようなアクセサリー類など、さまざまな作品を手がけている。

仕事人間である父、勝己さんに反抗しながらも、自分にも父に似た部分があること、それにも増してもの作り、七宝が好きなことに気づいた芳朗さんは、父に弟子入りした。勝己さんもこれからは、職人も少なくなり、今までの分業が成り立たなくなることや、ＩＴ時代を迎えてますます息子の感覚が必要になるという時代の変化を見越していた。

そこで父は芳朗さんに「一日でも早く技を吸収しろ」と、四〇年余り培った自分の技をすべて教え、同時に今まで下請けに出していた仕事もすべて一貫して自社の工房でできるように、必要な窯や道具を揃えた。そして五年後、「加藤七宝製作所」の代表になるよう芳朗さんに迫る。まだ「若すぎる」と拒んだ芳朗さんだったが、結局は承諾する。

色鮮やかな七宝の釉薬となる色ガラスは秘伝の調合で原料を混ぜ合わせて作る。

熟練した銀線の加工技術は習得に 10 年以上かかる。

銀線は専用の糊で仮に貼り付けていく。

釉薬は色ガラスを砂状にしたものに水やのりを入れて溶いて使う。

水分をコントロールしながら花びらの濃淡を描いていく。

関根 由子（せきね　よしこ）

1946年、東京生まれ。1969年、日本女子大学社会福祉学科卒業。地方新聞社へ家庭欄の記事を配信する通信社の代表を務める。長年、各地の女性職人たちへの取材を続けるかたわら、日本文化を再認識し、より楽しむための活動を主宰し、講座、展示会などの企画を行っている。著書に『伝統工芸を継ぐ女たち』（學藝書林）、編著書に『生き路びき―自分らしい生き方を探す』（家庭通信社編・博文館新社発行）

伝統工芸を継ぐ男たち

二〇一七年　七月五日　初版第一刷印刷
二〇一七年　七月一五日　初版第一刷発行

著　者　関根由子
写真・本文デザイン　山下三千夫
発行者　森下紀夫
発行所　論創社

東京都千代田区神田神保町一―三　北井ビル
電話〇三・三二六四・五一五四　FAX〇三・三二六四・五一三一
振替口座〇〇一六〇・一・一五五二六六

印刷・製本　中央精版印刷
ISBN978-4-8460-1601-2

©2017 Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。